

## 東日本大震災の復興支援にあたって

共同生活介護ひまわり  
主任 渥美 雅世

震災直後より個人的にボランティアが出来ないかと情報を収集していたのだが、中々チャンスがなく心苦しい日々を過ごしていたところ、東日本大震災支援プロジェクトの話聞き、是非にと懇願し参加させて頂くこととなった。

派遣にあたり、福島県および南相馬市の現状の様子の情報提示、さぼーとセンターぴあを含む福祉の現場での震災後の課題の把握、それらを踏まえたうえで浜松市、小羊学園における今後の起きうる地震対策の提案をしていけるよう取り組んでいきたいと思った。

まず南相馬市に到着し感じたことは、復興とは程遠い現状であるということだった。放射能による警戒区域だった区はまだ倒壊した家屋も手つかずのままであり、やっと人が入ることが許され、5月中旬になりボランティア等により、ガレキ撤去され始めている。震災より1年以上経過していてもこの状態であることは、この地に来なければ解らないことであり、復興の遅さは想像以上であることが解る。仮設住宅は南相馬市だけでも2000世帯以上、戻れる見込みもない方が多数いらっしゃるという現実を目の当たりにしたとき、少しでも多くの人たちに現状を伝えていかなければならないという使命感と知らないという危機感を持った。



私は5月からNPO法人「さぼーとセンターぴあ」が運営する就労継続B型事業所「ビーンズ」で働かせていただいている。20名の研修生（利用者）に対して、所長、職員3名、1週間ごとに代わるJDF（日本障害フォーラム）スタッフ1名、そして私の計5名という体制で支援を行っている。利用されている方は、重度の方から軽度の方までさまざまである。みなさんの仕事の内容は、缶バッチ製作、砂の小

分け（ぬいぐるみの中に入っている砂の重りの分量分け）、公共施設の清掃、さをり織り、図書館にて喫茶も行っている。缶バッチが好評で受注が多いこと、砂の小分けの仕事が増えたことで、できる仕事が多くなり仕事量も比較的充実していると思われる。研修生のみなさんは意欲的に仕事に取り組んでおり、あちこちから「終わったよ。次は？」と声が飛んでくる。その声を聞くと、こちらもすぐに次の仕事を提供し駆けずり回っている状態である。やはり人手不足は否めないが、職員の方々は研修生みなさんの意欲を絶やさないために奮闘している。

研修生全員の方が被災者であり、避難生活を経て、帰宅してきても屋外は控えた方がよいという制限もあり、また、いまだに仮設住宅での生活を強いられている方も多い。そんな生活の中だからこそ、より仕事のできる喜び、通うことのできる喜びもひとしおで、「楽しい」という声が多く聞かれるのだと思う。生活にメリハリがついたこと、仲間たちがいることにより精神的安定にもつながったと思われる。それは研修生だけでなく、保護者の方々にもいえることだと思った。その状況を踏まえると通所施設の重要性を強く感じた。いかに迅速に再開できるか、今からシュミレーションしたり、話し合ったりしておくことも避難訓練同様大切なことだと感じた。それは組織としてももちろんだが、個々で考えることが最も大切で、職員、保護者の方々にもそのような話ができる機会を設けていければよいと感じた。

最後に、この活動を全国から1週間単位で来られるJDFスタッフからは素晴らしい支援ですねと言って頂いている。3ヵ月もの間、派遣させていただけることは法人内のみなさんの協力なくして実現しなかったこと、そして、さぼーとセンターぴあのみなさんが気にかけて頂き、とてもよくして頂いていること、このような貴重な経験をさせて頂けること、すべてに感謝の気持ちでいっぱいである。残りの派遣期間を南相馬市のため、さぼーとセンターぴあのため少しでも役立てるよう、そして、帰ってきた際には、地域、法人へ還元できるよう頑張っていきたいと感じている。



福島県 南相馬市より